

私たち日本女性にとって、スポーツとは何だったのか、そして今、どのような意味を持つのか、将来、どのように発展させていけばいいのか。三百人の女性たちが京都で考え、語りあいました。来年一月には第二回会議が開催されます。

「明日を拓く女性の英知と躍動」をテーマに、第一回女性スポーツ京都会議（主催：京都新聞社、後援：京都府京都市、協力：WSF・JAPAN、協賛：味の素、京セラ、宝酒造、ヤクルト）が一月十七日、京都市中京区の都ホテルで開催されました。この会議は、二日後に同じく京都で行われた第四回全国都道府県対抗女子駅伝競走大会の協賛行事として開かれたもので、地元京都のほか大阪や、東京からもWSF・JAPANの会社や女性スポーツに関心のある一般の人たちが詰めかけ、約三百人の参加者が「これからの女性スポーツ」の在り方に耳を傾けました。



▲「母親が手本を」と小野さん

### 「女性の生き方とスポーツ」 基調講演……小野清子

基調講演はJOC（日本オリンピック委員会）の唯一の女性委員、小野清子さんによる「女性の生き方とスポーツ」。小野さんは1964年の東京オリンピックで、夫の喬氏と共に体操選手として参加し、おしどり選手と話題をまいて注目されましたが、当時、二

つづく記念対談は、いま注目の市民スポーツ、トライアスロンがテーマ。マラソンに、さらに自転車と水泳を加えたこの過酷ともいえる競技に実感を持ったアインマンの高石ともやさんと、昨年の「アイアンマン琵琶湖大会」で日本女性として一位になった萬處（まんどころ）雅子さんが「スポーツは楽しむもので、速く走れるから偉いとか、遅ければダメだということではない」と、市民スポーツに対する考え方をベラスに、トライアスロンの苦しさ、楽しさを語りあいました。

して、「スポーツは人間教育に不可欠のものであり、また、次代を担うこと私たちの気力を充実させ鍛えることこそ、親を含めた大人たちの責任です」と指摘しました。そのためには「まず、母親がスポーツに親しむことで、父親に、そして子どもたちにも、その輪が広がっていく」と、結論づけました。

体操選手の経験を土台に、市民スポーツの振興運動を通して得た広い視野と、五人のこどもの母親という立場が見事に調和した、説得力のある講演に、大きな拍手が湧きました。

### 「トライアスロン賛歌」 対談・高石ともや 萬處雅子



▲「スポーツは自分のペースで楽しみたい」という2人

「目で見える女性スポーツ史」  
スライド解説……三ツ谷洋子

日本の女性スポーツは百年以上の歴史があります。では、一体、昔ほど

### ▼年齢、立場の違いが白熱した議論を呼んだパネルディスカッション



人の子を持つママさん選手だったということが、まず、会場を埋めた主婦たち、共感を与えました。五輪では女子は団体で三位となりましたが、小野

さん夫妻は世界の壁の厚さを痛感し、翌年、市民スポーツ振興のためのスポーツクラブを設立し、以来、二十年間地道な活動を続けているとのこと。そ

#### △会議プログラム▽

- ▽開会・主催者あいさつ▽京都市新聞社長坂上守男、祝辞▽京都府知事代理・植田藤樹副知事、京都市長代理・増田健文文観局長▽基調講演「女性の生き方とスポーツ」▽JOC（日本オリンピック委員会）委員小野清子▽記念対談▽鉄人・と、鉄女」のトライアスロン賛歌▽高石ともや、萬處雅子▽スライド解説「目で見える日本女性スポーツ史」▽三ツ谷洋子▽パネルディスカッション「これからの女性スポーツ」▽コーディネーター、高石ともや、三ツ谷洋子、パネリスト▽中沢伊登子、広中ミユキ、荒木由美子、岡本久美子、小倉美津子▽女性スポーツ京都会議▽閉会（敬称略）

泰西エレガンス、ラサール。日本にデビュー。



新登場は欧米が先でした。欧米の市場上で5年間愛され、育まれてきたラサールが日本に登場します。アードを思わせる直線使いのダイヤルが、薄く、すぐれた仕上げ。SIMPLE IS BEST。つやより、つぎつめた美しい。世界国籍のクォーツには、最も高価で美しいコンテナボラがな発着感があります。

# LASSALE

●ダイヤル 約 ¥7,500 ●ダイヤル ¥10,000 ¥12,000 ¥15,000 ¥18,000

株式会社 藤田セイコー  
HATCHI KIKO CO., LTD.

な女性がスポーツに親しんでいたのか、どのような過程を経て、今のブームにつながっているのか、それをスライドを使ってわかりやすく説明してくれたのがWSPF・JAPAN代表の三ツ谷洋子さんによる「目で見る日本女性スポーツ史」でした。

昨年の「京都女子駅伝」で、各都道府県の代表選手が気合いを入りにスタートする一枚目のスライドの次には、明治、大正と、一般女性の生活は家事を含めかなり重労働を強いられ、また、主婦は家庭にじりついて、スポーツを楽しめるのは、ごく一部の裕福な家庭に限られていたという、女性の生き方をたどるものでした。

スポーツが上流階級のたしなみとしてもはやされた一方では、良妻賢母教育の一環として、女学校で体育が採用され奨励されたこと、そして、このような流れの中から、世界的に活躍した日本女子スポーツ界のパイオニアとなった人見絹枝が生れたことなどが、解説されました。

ハカマをつけたテニス姿や、ダブルブのブルマーで次々に陸上の世界記録を作った人見絹枝の写真など、ふだんは目にするこのない昔の女性の様子も見て、改めてここ百年余の女性の生活の変遷が、現代社会の思われた環境に気づかされました。

「これからの女性スポーツ」  
パネルディスカッション  
中沢伊登子 広中ミユキ 荒木田裕子  
岡本久美子 小倉美津子  
高石ともや 三ツ谷洋子



▲壇上のディスカッションに耳を傾ける参加者

女性スポーツのこれまでの足とをたどった後は、「これから」をテーマにしたパネルディスカッション。パネリスト五人の顔ぶれば、20歳の岡本久

美子さん（テニス選手、ユニバーシアード神戸大会日本選手団主将）から、70歳の中沢伊登子さん（日本O.G軟式蹴球連盟会長、まで年齢は半世紀の幅

### 女性スポーツ京都宣言（全文）

女性スポーツが広く深く浸透し、女性の生活文化に急激な変化をもたらしている今、この京都会議を通して、私たちは女性の肉体的、精神的育きは、それが決して男性と相当するためのものではなく、次代の生命を体内に宿し、育て、力強く生きていくための、本来、女性に備わっている特長であることを再認識しました。

一世紀前には、ひと握りの女性が享受したスポーツが、現代社会の経済的、文化的発展を基盤とした大衆の生活水準の向上によって、だれにでも手の届く余暇活動として受け入れられるようになったこと、そしてそこから生まれた各スポーツ競技の頂点の女性たちの活躍が、一般女性の生活文化に大きな影響を与えてきたことを知りました。さらにそのインパクトによるスポーツ環境、生活環境の変化が、さまざまな面で問題を抱えていることも自覚しました。

女性が心身ともに健康であることが、社会生活、文化を発展させる大きな力であり、そのためにはスポーツが今後、より重要な役割を果たすという認識の上に立ち、これからは私たち一人ひとりが、それぞれの分野で問題を解決していくという地道な努力の積み重ねこそが、女性スポーツの将来を約束するものであるという結論を得ました。私たちは、今後お互いに協力し合い、この京都会議を通して議論を深め、実践し、女性スポーツの振興と発展を目指すことを、ここに宣言します。

### 会議をふりかえって

昨夜、「女性スポーツ京都会議」開催の企画協力依頼を受けた時、私は正直なところ、実現するとは思っていませんでした。というのも、一般に会議とかシンポジウムというものは、手回がかかるわりに、通常のスポーツイベントに比べ、PR効果がそれほど期待できないといわれているからです。

しかし、私の予想を見事に裏切り、会議は成功という評価をいただき喜ぶを閉じました。さらに嬉しいことに、

### 三ツ谷洋子

主催の京都新聞社では来年も第二回を開催して下さるとのこと。

私自身、ときどき「女性」にこだわりたいではないかと気になることもありますが、そんな姿勢を正面から受け止めてくれた京都新聞社および協賛各社、そして大阪電通など関係企業の担当者に、いま、この紙面を通じてお礼を申し上げたい気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。今後ともよろしくお願いたします。

# JAL SPORTS DESK

日本航空

スポーツ海外遠征のプランづくりから  
ご帰国まですべてをお世話します。  
JALスポーツデスクです。

スポーツを通じて汗のふれあいは、言葉を超えた心のふれあいを生みます。ラグビー、サッカー、テニス、ゲートボールなど、あらゆるスポーツチームの海外遠征、JALアマチュアチームの国際交流をお世話します。学校や会社のクラブ、地域のスポーツクラブ、ママさんチームなどには、貴重な国際試合体験、海をこえた友情が生まれ、素晴らしい対戦相手探し、試合会場の手配、ホテルや交通機関などのお世話、親善パーティーなど、海外からもアマチュアスポーツチームが日本へ、人間交流の輪が大きくなっていきます。

●JALスポーツデスク：札幌(011)241-4144/東京(03)284-8687/新潟(0252)41-5770/金沢(0762)64-3211/名古屋(052)563-4151/大阪(06)223-2153/福岡(092)281-2221/長崎(0958)22-4114/熊本(096)322-5213/鹿児島(0992)58-2311/沖縄(0988)62-3351

があり、また、指導者の立場にある広中ミユキさんは体操（元五輪代表、京都スイトピア体操クラブトレーナー）、また、荒木田裕子さんはバレーボール（モントリオール五輪金メダリスト、国際選手コーチ）と、個人競技、団体競技の差もあります。さらに、体育教師の立場から小倉美津子さん（仏教大学助教、同学生部長）が加わり、それぞれの競技や立場の違いが、ディスカッションの内容に厚みを加える結果となりました。ディスカッションの進行役であるコーディネーターは高石さんと三ツ谷さん。

まず、各パネリストが自己紹介を兼ねて、スポーツとの出会いを語りました。高等女学校でスポーツに親しむようになったというのは、年長の中沢さんと、小倉さん。また、広中さんはスポーツに無関心な両親の反対を押し切り日体大で体操の素質の花を開かせ、メキシコ、ミュンヘン、モントリオールの五輪に出場しました。一方、金メダリストの荒木田さんは中学時代に、希望していたバスケットボール部がなく仕方なくバレーボールを始めたそうです。荒木田さんとは対照的に、選手になるべくしてなったという印象を受けたのは、テニスの岡本さん。父親はプロ野球の元選手で、今は近鉄監督の岡本伊三美さん。彼女は、6歳のときテニスをしていた母にたくっついてやってみたのがきっかけで、「いま考えればもっと他のスポーツをしてみたらよかった。会場にいらっしやるお母さん方は、英才教育を子どもに押しつけてないでしょう」と、子どもを持つ親たちがドキリとさせられる発言がありました。

後半は、それぞれが感じている問題点や、その解決策について話し合われました。中沢さんは「主婦がスポーツを楽しむには、まず、家庭をきちんと切り盛りしてほしい。そして、父親も一緒にスポーツができる余裕のある社会になってほしい」と提言。荒木田さんはスイスでの指導経験から「日本人はスポーツをする時に、身構えすぎるのではないかと指摘し「ボール一つあれば、庭で子どもとバレーができるのもスポーツなんです」と、具体的な例で示しました。

このほか「このごろの若い人たちは気力も体力もない」と嘆く小倉さんからは「子どもにやる気をおこさせることが第一」との意見が出ました。そのため、「親の過保護な姿勢を改めるだけでなく、子どもにやる実力以上の過剰な期待にも、問題がありそうです。これは「指導者の悩み」と、広中さんはうなずきました。約2時間のディスカッションを通して出てきた問題も、男女の性差にかかわりのないものも、少なくありませんでした。最後は、それらを女性の立場からどう捉え解決していくかを、三ツ谷さんが「宣言」し、会議を締めくくりました。